

卷頭言

〈小特集〉 ダークツーリズム研究の新地平
——ダークネスを射つSpecial Issue: New Horizon of Dark Tourism Studies:
Shooting the "Darkness"

本特集は、2015年11月8日（日）、キャンパスプラザ京都・6階・第1講義室にて開催された、立命館大学人文科学研究so重点プロジェクト「グローバル化とアジアの観光」主催ワークショップ「ダークツーリズム研究の新地平——ダークネスを射つ」において交わされた議論を中心としたものである。

ある場所が多様な社会状況のもとで、何らかのポリティクスを通じて「ダークネス」を帯びているのだとすれば、ダークツーリズムの場所を観光する行為自体、すでに中立的ではないメッセージを帯びた媒体となっているのだと言える。

ダークツーリズムで観光されるものは、一体「誰にとってのダークネス」なのか（ダークネスでないのか）？

どのような状況のもと、地域の何を、いかにダークネスとする必要があった（なかった）のか？

地域のあるものをダークネスとする（ダークネスとしない）ことで、得られたもの（失われたもの）は何なのか？

そもそもダークツーリズムとは、どのような社会的欲望に支えられた観光なのか？

これらのことを含め、〈ダークツーリズムとは何か？〉という問いを徹底してクリティカルかつラディカルに問い直していく必要がある。本特集

は、こうした問題意識をもって、ダークツーリズム研究の新地平をめざし編纂された。

まず須藤論文では、人工的な「表象」と複雑性を抱えた「現実」が交錯する「なまの現実」がテーマの体験型観光こそがダークツーリズムの特徴であるとされる。このような「光」の表領域から「影」の裏領域へと侵入を試みる観光は、排除したはずの複雑性、多義性、他者性を社会のなかに再導入することによって、一方では日常に新しい視点と連帯をもたらす。また一方では、観光を政策の全面に押し出す行政やコンサルタントや観光業者に先回りされることによって単なる「虚構」消費の一つ、あるいは政治的プロパガンダへと回収され、「他者性」に向けた人々の主体的参与がスポイルされる可能性を持つと、須藤は主張する。

木村論文では、産業遺産をめぐるフィールドワークにおける筆者の経験から、ダークツーリズムの実践の困難が論じられている。その際、木村は、ゲストがこうした「地域」のコンテクストを十分に理解し、ホストとともに作り出す相互作用を十分に行うときにのみ、「持続可能な」ダークツーリズムが実現されるのだと主張する。

須永論文では「釜ヶ崎のまちスタディ・ツアー」の事例を、都市貧困とツーリズムをめぐる諸研究の文脈に位置づけ、その可能性と現状について考察が展開されている。このことを通じて、須永は、反貧困という社会変革のための資源を生み出すツーリズムの可能性や、他者化に抗して〈地続き〉の存在として釜ヶ崎を見る新たなまなざしが立ち現れてくる過程を明らかにする。

最後に佐々論文では、中国東北部において、韓国系の民族独立運動関連史跡がどのような形で観光地化されているのかが考察されている。その際、佐々は、特に青山里戦闘に関連する史跡や施設に焦点をあてて考察を展開している。

以上の諸論稿を一つの契機に、「ダークツーリズム研究の新地平」について多種多様な議論や批判が様々な場所で活発に交わされるようになれば幸いである。

2017年3月

遠藤英樹・藤巻正己（立命館大学文学部教授）

